

てぶくろ か 手袋を買いに

に い み な ん き ち
新美南吉



さむ ふゆ ほっぼう きつね おやこ す もり き
寒い冬が北方から、狐の親子の棲んでいる森へもやって来ました。

あるあきほらあな こども きつね で
或朝洞穴から子供の狐が出ようとしたが、

「あっ」と叫んで眼を抑えながら母さん狐のところへころげて来ました。

「母ちゃん、眼に何か刺さった、ぬいて頂戴早く早く」と言いました。

かあ きつね
母さん狐がびっくりして、あわてふためきながら、眼を抑えている子供のて

を恐る恐るとりのけて見ましたが、何も刺さってはいませんでした。母さん狐

は洞穴の入口から外へ出て始めてわけが解りました。昨夜のうちに、真っしろ ゆき

どっさり降ったのです。その雪の上からお陽さまがキラキラと照していたので、

雪は眩しいほど反射していたのです。雪を知らなかった子供の狐は、あまり強

い反射をうけたので、眼に何か刺さったと思ったのです。

こども きつね あそ い まわた やわら ゆき うえ か まわ ゆき
子供の狐は遊びに行きました。真綿のように柔かい雪の上を駆け廻ると、雪

の粉が、しぶきのように飛び散って小さい虹がずっと映るのです。

すると突然、うしろで、

「どたどた、ざーっ」と物^{もの}凄^{すご}い音^{おと}がして、パン粉^このような粉雪^{こなゆき}が、ふわーっと子^こ狐^{ぎつね}におっかぶさ^きって来^きました。子^こ狐^{ぎつね}はびっくりして、雪^{ゆき}の中^{なか}にころがるようにして十^{じゅう}米^{めーとる}も向^むこうへ逃^にげました。何^{なん}だろうと思^{おも}ってふり返^{かえ}って見^みましたが何^{なに}もい^いませんでした。それは縦^{もみ}の枝^{えだ}から雪^{ゆき}がなだれ落^おちたのでした。まだ枝^{えだ}と枝^{えだ}の間^{あいだ}から白^{しろ}い絹糸^{きぬいと}のように雪^{ゆき}がこぼれていました。

間^まもなく洞^{ほら}穴^{あな}へ帰^{かえ}って来^きた子^こ狐^{ぎつね}は、
「お母^{かあ}ちゃん、お手^て々^てが冷^{つめ}たい、お手^て々^てがちんちんする」と言^いって、濡^ぬれて牡^{ばつ}丹^{たん}色^{いろ}にな^なった両^{りょう}手^てを母^{かあ}さん狐^{ぎつね}の前^{まえ}にさしだしました。母^{かあ}さん狐^{ぎつね}は、その手^てに、は——っと思^いをふっかけて、ぬくとい^{かあ}母^てさんの手^てでやんわり包^{つつ}んでやりながら、
「もうすぐ暖^{あた}たかくなるよ、雪^{ゆき}をさわると、すぐ暖^{あた}たかくなるもんだよ」といいましたが、かあいい坊^{ぼう}やの手^てに霜^{しも}焼^{やけ}ができてはかわいそうだから、夜^{よる}にな^なったら、町^{まち}まで行^いって、坊^{ぼう}やのお手^て々^てにあ^{けい}ような毛^{けい}糸^{いと}の手^て袋^{ぶくろ}を買^かってやろうと思^{おも}いました。

暗^{くら}い暗^{くら}い夜^{よる}が風^{ふう}呂^ろ敷^{しき}のような影^{かげ}をひろげて野^の原^{はら}や森^{もり}を包^{つつ}みにや^きって来^きましたが、雪^{ゆき}はあ^{しろ}まり白^{しろ}いので、包^{つつ}んでも包^{つつ}んでも白^{しろ}く浮^うびあ^{うか}がっていました。

親^{おや}子^この銀^{ぎん}狐^{ぎつね}は洞^{ほら}穴^{あな}から出^でました。子^こ供^{ども}の方^{ほう}は母^{かあ}さんのお腹^{なか}の下^{した}へはいりこ^こんで、そこ^めからまんまるな眼^めをぱちぱちさせながら、あ^みっちやこ^みっちを見^みながらあ^{ある}る歩^いいて行^いきました。

やがて、行手^{ゆくて}にぼつりあかりが一つ見え始めました。それを子供の狐^{こども きつね}が見つけて、

「母ちゃん、お星^{ほし}さまは、あんな低いところにも落ちてるのねえ」とききました。

「あれはお星^{ほし}さまじゃないのよ」と言って、その時母さん狐^{ときかあ きつね}の足はすくんでしまいました。

「あれは町の灯^{まち ひ}なんだよ」

その町の灯^{まち ひ}を見た時、母さん狐^{ときかあ きつね}は、ある時町へお友達と出かけて行って、
とんだめにあったことを思^{おも}いだしました。およしなさいっていうのもきかないで、
お友達^{ともだち}の狐^{きつね}が、或る家の家鴨^{あ いえ あひる}を盗^{ぬす}もうとしたので、お百姓^{ひゃくしょう}に見つかって、さんざ^お追いまくられて、命^{いのち}からがら逃げたことでした。

「母ちゃん何^{なん}してんの、早く行^{はや}こうよ」と子供の狐^{こども きつね}がお腹^{なか}の下から言うのでしたが、母さん狐^{かあ きつね}はどうしても足^{あし}がすすまないのでした。そこで、しかたがないので、坊^{ぼう}やだけを一人^{ひとり}で町^{まち}まで行^いかせることになりました。

「坊^{ぼう}やお手^て々^てを片方^{かたほう}お出^だし」とお母さん狐^{かあ きつね}がいました。その手^てを、母さん狐^{かあ きつね}はしばらく握^{にぎ}っている間^{あいだ}に、可愛^{かわ}い人^{にんげん}の子^こ供^{ども}の手^てにしてみました。坊^{ぼう}やの狐^{きつね}はその手^てをひろげたり握^{にぎ}ったり、抓^{つね}って見^みたり、嗅^かいで見^みたりしました。

「何^{なん}だか変^{へん}だな母^{かあ}ちゃん、これなあに？」とて、雪^{ゆき}あかりに、またその、人^{にんげん}間^{かん}の手^てに変^かえられてしまった自^じ分^{ぶん}の手^てをしげしげと見^みつめました。

「それは人間の^{にんげん}手^てよ。いいかい坊^{ぼう}や、町^{まち}へ行^いったらね、たくさん人間の^{にんげん}家^{いえ}があるからね、まず表^{おもて}に円^{まる}いシャッポの着^{かんぱん}板^{ばん}のかかっている家^{いえ}を探^{さが}すんだよ。それがみ^みつかったらね、トントンと^と戸^たを叩^{たた}いて、今晚^{こんばん}は^いって言^いうんだよ。そうするとね、なか^{なか}から人間の^{にんげん}、すこし戸^とをあけるからね、その戸^との隙^{すき}間^まから、こっちの手^て、ほらこの人間の^{にんげん}手^てをさし入^いれてね、この手^てにちょうどいい手袋^{てぶくろ}頂^{ちょう}戴^{だい}って言^いうんだよ、わかったね、決^けして、こっちのお手^て々^々を出^だしちゃ駄^だ目^めよ」と母^{かあ}さん狐^{ぎつね}は言^いいきかせました。

「どうして？」と坊^{ぼう}やの狐^{ぎつね}はききかえしました。

「人間の^{にんげん}、相^あ手^{いて}が狐^{ぎつね}だと解^{わか}ると、手袋^{てぶくろ}を売^うってくれないんだよ、それどころか、掴^{つか}まえて檻^{おり}の中^{なか}へ入^いれちゃうんだよ、人間^{にんげん}ってほんとに恐^{こわ}いものなんだよ」
「ふーん」

「決^けして、こっちの手^てを出^だしちゃいけないよ、こっちの方^{ほう}、ほら人間の^{にんげん}手^ての方^{ほう}をさしだすんだよ」と言^いって、母^{かあ}さんの狐^{ぎつね}は、持^もって来^きた二^{ふた}つの白^{はく}銅^{どう}貨^かを、人間^{にんげん}の手^ての方^{ほう}へ握^{にぎ}らせてやりました。

子供^{こども}の狐^{ぎつね}は、町^{まち}の灯^ひを自^めあてに、雪^{ゆき}あかりの野^の原^{はら}をよちよちや^いって行^いきました。始^{はじ}めのうちは一^{ひと}つきりだった灯^ひが二^{ふた}つになり三^{みつ}つになり、はては十^{とう}にもふえました。狐^{ぎつね}の子^こ供^{ども}はそれを見^みて、灯^ひには、星^{ほし}とおな^{おな}じように、赤^{あか}いのや黄^きいのやあお^{あお}いのあるんだなと思^{おも}いました。やがて町^{まち}にはい^{とお}りましたが通^{とお}りの家^{いえ}々^{ええ}はも

うみんな^と戸^しを閉めてしまって、高い^{たか}窓^{まど}から暖^{あたた}かそうな^{ひかり}光^{みち}が、道^{みち}の雪^{ゆき}の上^{うへ}に落^おち
ているばかりでした。

けれど表^{おもて}の看板^{かんばん}の上^{うへ}には大^{たい}てい小^{ちい}さな電燈^{でんとう}がともっていましたので、狐^{きつね}の
子^こは、それを見^みながら、帽子屋^{ぼうしや}を探^{さが}して行^いきました。自転車^{じてんしゃ}の看板^{かんばん}や、眼鏡^{めがね}の看板^{かんばん}
やその他^{ほか}いろんな看板^{かんばん}が、あるものは、新^{あた}しいペンキで画^かかれ、或^あるものは、
古^{ふる}い壁^{かべ}のようにはげていましたが、町^{まち}に始^{はじ}めて出^でて来^きた子^こ狐^{ぎつね}にはそれらのもの
がいったい何^{なに}であるか分^{わか}らないのでした。

とうとう帽子屋^{ぼうしや}がみつかりました。お母^{かあ}さんが道^{みち}々^{みち}よく教^{おし}えてくれた、黒^{くろ}い大^{おお}
きなシルクハットの帽子^{ぼうし}の看板^{かんばん}が、青^{あお}い電燈^{でんとう}に照^{てら}されてかかっていました。

子^こ狐^{ぎつね}は教^{おし}えられた通^{とお}り、トントンと戸^とを叩^{たた}きました。

「^{こんばん}今晚^はは」

すると、中^{なか}では何^{なに}かことこと音^{おと}がしていましたがやがて、戸^とが一^{いっすん}寸^{すん}ほどゴロリ
とあいて、光^{ひかり}の帯^{おび}が道^{みち}の白^{しろ}い雪^{ゆき}の上^{うへ}に長^{なが}く伸^のびました。

子^こ狐^{ぎつね}はその光^{ひかり}がまばゆかったので、めんくらって、まちがった方^{ほう}の手^てを、
——お母^{かあ}さまが出^だしちゃいけないと言^いってよく聞^きかせた方^{ほう}の手^てをすきまからさ
しこんでしまいました。

「このお手^て々にち^てょうどいい手袋^{てぶくろ}下^{くだ}さい」

すると帽子屋^{ぼうしや}さんは、おやおやと思^{おも}いました。狐^{きつね}の手^てです。狐^{きつね}の手^てが手袋^{てぶくろ}を

くれと言うのです。これはきっと木の葉で買いに来たんだなと思いました。

そこで、

「先にお金を下さい」と言いました。子狐はすなおに、握って来た白銅貨を二

つ帽子屋さんに渡しました。帽子屋さんはそれを人差し指のさきにのっけて、

カチ合せて見ると、チンチンとよい音がしましたので、これは木の葉じゃない、

ほんのお金だと思いましたので、棚から子供用の毛糸の手袋を取り出して来

て子狐の手に持たせてやりました。子狐は、お礼を言ってまた、もと来た道を

帰り始めました。

「お母さんは、人間は恐ろしいものだって仰有ったがちっとも恐ろしくないや。

だって僕の手を見てもどうもしなかったもの」と思いました。けれど子狐は

いったい人間なんてどんなものか見たいと思いました。

ある窓の下を通りかかると、人間の声がしていました。何というやさしい、

何という美しい、何と言うおっとりした声なんでしょう。

「ねむれ ねむれ

母の胸に、

ねむれ ねむれ

母の手に――」

子^こ狐^{ぎつね}はその唄^{うた}声^{こえ}は、きっと人^{にん}間^{げん}のお母^{かあ}さん^{こえ}の声^{こえ}にちがいないと思^{おも}いました。

だって、子^こ狐^{ぎつね}が眠^{ねむ}る時^{とき}にも、やっぱり母^{かあ}さん^{ぎつね}狐^{ぎつね}は、あんなやさしい声^{こえ}でゆすぶってくれるからです。

するとこんどは、子^こ供^{ども}の声^{こえ}がしました。

「母^{かあ}ちゃん、こんな寒^{さむ}い夜^{よる}は、森^{もり}の子^こ狐^{ぎつね}は寒^{さむ}い寒^{さむ}いって啼^ないてるでしょうね」

すると母^{かあ}さん^{こえ}の声^{こえ}が、

「森^{もり}の子^こ狐^{ぎつね}もお母^{かあ}さん^{ぎつね}狐^{ぎつね}のお唄^{うた}をきいて、洞^{ほら}穴^{あな}の中^{なか}で眠^{ねむ}ろうとしているでし

ょうね。さあ坊^{ぼう}やも早^{はや}くねんねしなさい。森^{もり}の子^こ狐^{ぎつね}と坊^{ぼう}やとどっちが早^{はや}くねん

ねするか、きっと坊^{ぼう}やの方が早^{はや}くねんねしますよ」

それをきくと子^こ狐^{ぎつね}は急^{きゅう}にお母^{かあ}さん^{こい}が恋^{こい}しくなって、お母^{かあ}さん^{ぎつね}狐^{ぎつね}の待^まってい

る方^{ほう}へ跳^とんで行^いきました。

お母^{かあ}さん^{ぎつね}狐^{ぎつね}は、心^{しん}配^{ぱい}しながら、坊^{ぼう}やの狐^{ぎつね}の帰^{かえ}って来^くるのを、今^{いま}か今^{いま}かとふる

えながら待^まっていましたので、坊^{ぼう}やが来^くると、暖^{あた}か^{たか}い胸^{むね}に抱^だきしめて泣^なきたいほ

どよろこびました。

二^に匹^{ひき}の狐^{ぎつね}は森^{もり}の方^{ほう}へ帰^{かえ}って行^いきました。月^{つき}が^で出^でたので、狐^{ぎつね}の毛^けなみが銀^{ぎん}色^{いろ}に

光^{ひか}り、その足^{あし}あとには、コバルトの影^{かげ}がたまりました。

「母^{かあ}ちゃん、人^{にん}間^{げん}ってちっとも恐^{こわ}かないや」

「どうして？」

「坊、間違えてほんとうのお手々出しちゃったの。でも帽子屋さん、掴まえやし
なかったもの。ちゃんとこないいい 暖い手袋くれたもの」
と言って手袋のはまった両手をパンパンやってみせました。お母さん狐は、
「まあ！」とあきれましたが、「ほんとうに人間はいいものかしら。ほんとうに
人間はいいものかしら」とつぶやきました。

底本：「新美南吉童話集」岩波文庫、岩波書店

1996（平成8）年7月16日第1刷発行

1997（平成9）年7月15日第2刷発行

入力：大野晋

校正：伊藤祥

1999年3月2日公開

2011年4月27日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、[青空文庫（http://www.aozora.gr.jp/）](http://www.aozora.gr.jp/)で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。